常葉大学健康プロデュース学部雑誌
第13巻第1号，2019年2月，145－154頁

研究ノート

日本のロールシャッハ法の輸入過程

佐渡忠洋[1)]　古谷　学[1)]　堀田　亮[2)]

1) 常葉大学健康プロデュース学部心身マネジメント学科　2) 岐阜大学保健管理センター

Importing Rorschach's Inkblot Method to Japan

Tadahiro SADO, Manabu FURUTANI and Ryo HORITA

要　旨

本稿は、日本にロールシャッハ法（Rorschach's Inkblot Method：RIM）が輸入されるプロセスを検討したものである。まず、日本で最初のRIM論文が発表される1930年までに、日本でRIMがどのように言及されてきたかを整理し、さらに、日本が世界の中で最も早くRIMを取り入れた国の1つであることを明確化した。次に、H. Rorschachの『精神診断学』原著初版が1930年までに日本へ3冊入っていたことを明らかにした。最後に、第二次世界大戦中にRorschachの知見の体系的追試を行った黒田重英の博士論文を検討し、日本のRIM史における黒田の業績の意義を論じた。

キーワード：ロールシャッハ法、歴史、『精神診断学』、黒田重英

Abstract

This paper discusses the process by which Rorschach's Inkblot Method (RIM) was imported to Japan. By summarizing the way in which the RIM research was first published in 1930, this paper clarifies that Japan was one of earliest countries to import the method. This paper also shows that three books of H. Rorschach's *Psychodiagnostik* were imported to Japan during 1930. A summary topic of discussion is Kuroda Shigehide's doctoral dissertation, which supplementary and systematically examined Rorschach's findings during the Second World War. The Japanese historical significance of this work is also examined.

Keywords : Rorschach's Inkblot Method, history, *Psychodiagnostik*, Shigehide Kuroda

1．はじめに

臨床心理学の根幹は心理療法である。とはいえ、臨床心理学の歴史を記述する上で、心理アセスメントが果たした役割を無視するわけにはいかない。今日まで幾多の心理アセスメント技法が創案されてきた。実際に使用される技法は、対象者と臨床家の特徴、および現場のニーズなどの函数から選択されるが、種々の技法の中でロールシャッハ法（Rorschach's Inkblot Method：RIM）が最も代表的なものであることに、臨床家から異論は出ないであろう。したがって、われわれは臨床心理学史を捉える方法の1つに、RIMの歴史の記述を考えることができる。

スイス人精神医学者Hermann Rorschach（1884－1922）が創案したこの技法は、2021年に誕生100年を迎える。RIMほど多くの研究論文が発表され、専門書が刊行されている技法は、日本には存在しない。この事実は、RIMが臨床心理学史において極めて重要な地位を占めていることの証左である。

日本におけるRIMの歴史に関しては、Kataguchi（1957）、堀見ら（1958）、片口（1987, pp. 13-15）、Ogawa（2004）、Sorai & Ohnuki（2008）、小川（2011）、佐渡ら（2015）などの報告があるものの、これらでは日本における最初期の歴史を十分述べていない。史実の記述が不十分で、曖昧な点が多く残されている。そこで、筆者らはこれまで、日本におけるRIMの最初期をより明確化するための歴史的調査を進めてきた。

本研究では、筆者らが行ってきた調査結果、特に文献学的調査とインタビュー調査から得られた情報を整理し1913～1941年における日本のRIM史の特徴を描出する[1)]。

2．1930年の本邦初論文まで

1921年、Rorschachは『精神診断学 *Psychodiagnostik*』を上梓した。この年は、第一次世界大戦（1914－1918）とスペイン風邪大流行（1918－1919）により世界が甚大な被害を被った後で、日本では大正後期である。Rorschachは今では、RIMの創案者としてのみ顧みられるが、彼が日本のアカデミックな場に登場するのはRIM創案以前であった。

2.1　H. Rorschachへの言及

1913年、Rorschachの業績がわが国で最初に紹介された。Rorschachの博士論文と同じ年に刊行された犯罪学論文「朦朧状態中に行へる馬盗み（もうろう状態での馬泥棒）」（Rorschach, 1912／1986）が、氏家信（当時、巣鴨脳病院）の抄訳で日本神経学会（現在の日本精神神経学会）の機関紙『神經學雑誌』（後の『精神神経学雑誌』）に掲載された（氏家, 1913）。この論文は滅多に注目されないが、彼の精神分析の関心が現れており、C. G. Jungの言語連想検査の実施結果も僅かにあって、Rorschachの学問的志向を捉えるには重要な論文である。

1919年、田村於兎（当時、岡山医学専門学校）の報告の中ではRorschachの論文「松果体腫瘍の病理学の手術可能性について」（Rorschach, 1913）が引用されている（田村, 1919）。これはEllenberger（1954／1999, p.18）が「良心的な業績であったが、インスピレーションにもとづいていない」と評した、Rorschachには珍しい病理学研究であった[2)]。

2.2　RIMへの言及

1923年、日本で初めてRIMという名称が出現した。それはOtto Klemm（当時、ライプチッヒ大学）から松本亦太郎（当時、東京帝国大学）へ宛てた学会報告の中においてであり、これは邦訳されて『日本心理學雑誌』に掲載された（クレム, 1923）。

後述するように、日本で最初のRIM研究発表は1930年であるが、それ以前にも日本にはこうした前史が存在したのである。

2.3　日本で最初のRIM研究

日本のRIM研究の始まりは、2人の研究者に求めることができる。

1人は、精神医学者の岡田強（1895－1974）である。RIMに関して、岡田は1930年に1つの学会発表（岡田, 1930a）と2編の論文（岡田, 1930b＆c）がある。また、彼は2年後に論文3編を刊行し（岡田, 1932a, b＆c）、同年それらをまとめる形で、RIMに関する研究で医学博士論文を提出している。これはRIMを課題とした博士論文としては、我が国で最初のものである（岡田, 1932d）[3)]。当時のRIM事情が分かるよう、岡田によるRIM記録の一例を掲載する（図1）。

いま1人は、心理学者の内田勇三郎（1894－1966）である。内田は著書『素質型と其の心理學的診斷』（内田, 1930）の中で、最初の日本産図版を提示している[4)]。そして同年、共同研究者らと共に2編のRIM論文を発表した（内田ら, 1930a & b）。

現在のところ、以上が日本のRIMの始まりと考えられる。筆者らは数年にわたりRIM輸入過程を調査したが、これ以上の史実を発見するには至らなかった。したがって、RIMが生まれた1921年から、岡田と内田の両業績が出る1930年までは、日本のRIM史は空白期間となっている。

主として英・独・仏語圏での研究業績を一覧にまとめたLang（1966）を精査すると、1929年（日本で最初にRIM論文が刊行された1930年の前年）までで発表されたRIM研究は29編のみである。また、筆者らが調べた限り、1931年（日本で最初のRIM博士論文を岡田が提出した1932年の前年）までで、世界におけるRIM学位論文（就任論文も含む）は11編あるにすぎない[5)]。こ

三十四歳、女、主婦、精神分離症（破瓜病）。
表情運動ニ缺ケ、稍〻無爲的ニ傾キ、談話ニモ感情的抑揚ナク、無關心的ナ語調デアル。
供述試験：　（無關心的ナ態度デ）「子供ガ寢テマス。赤チャンガダツコシテ…猫モ居マス」

RIM：

Ⅰ	蝙蝠（ヘ）	D	F	－	動		**計算**	
	鳥（全體ノ上三分ノ二）	Dd	F	－	動	新－	答總數＝17	
	地圖（全體）	G	F	＋	地圖	新＋	G＝7	D＝7
Ⅱ	鳩ノ心臓（ホ）	D	FbF		解	新	Dd＝2	Dzw＝1
	虎ノ目（イ）	D	FFb	－	動部	新－	F＝9（－3）	
	電燈（イ）	D	FFb	＋	動		FFb＝5（－2）	
Ⅲ	骸骨（ロ）	G	F	＋	人		FbF＝3（－1）	
Ⅳ	龍ノ目（ホ）	Dd	F	＋	動部		動＝7	動部＝2
Ⅴ	蝙蝠（全體）	G	F	＋	動		人＝1	解＝1
Ⅵ	コホロギ（全體）	G	F	－	動		植＝4	地圖＝2
	地圖（全體）	G	F	＋	地圖		物＝1	
Ⅶ	鰈六匹、水中ヲ泳グ（全體）	G	F	＋	動		F＋＝67%	
Ⅷ	蝶（ヘ）	D	FFb	＋	動		動＝35%	
Ⅸ	木ヲ切リ割ツタトコロ（全體倒ニ）	G	FFb	－	植	新－	新＝31%∓	
Ⅹ	花ビラ（外側下方褐色）	D	FbF	＋	植		把握型	
	矢車草（ホ）	D	FFb	＋	植		＝G-D-Dd-Dzw	
	三色菫（中部白ト其周圍ヲ含ム、倒ニ）	Dzw	FbF	－	植	新－	繼起＝整然	

最初無關心的ニワカルモンデスカト言フガ徐々ニ答ヘル。體驗型ハ著明ニ外向的デ分裂症性小部分反應ヲ與ヘル傾向ガアル。形態視不良デ新規反應モ不良ノモノガ多イ。

※　現在の表記を参考に原文に若干の手を加えた。スコアは H. Rorschach の原法で記されており、反応の括弧内の記載は岡田独自の領域指定を意味する。

図 1　岡田強による RIM 記録の一例（岡田，1932c より）

れらは、スイスから約 9,000km も離れた極東・日本が、世界の中でも RIM 研究にいち早く着手した国の 1 つに数えられうることを示す十分な根拠であろう。

3．『精神診断学』の輸入

1921 年に刊行された Rorschach の『精神診断学』は、どのようにしてわが国へと入って来たのか。岡田と内田の両名は如何にして『精神診断学』を入手できたのだろうか。日本の RIM の最初期を考えるうえで、この問い立てには意義がある。『精神診断学』原著第 2 版は 1932 年に、英語訳は 1942 年に刊行されているため、1930 年までに入手できた書籍は原著初版以外には考えられない。

結論を先取りすれば、筆者らの調査でもこの点は判明しなかった。

3.1　岡田の入手経緯

岡田強の最初の論文には『精神診断学』が引用されており、彼が原著初版を保有していたことに間違いはない。ただし、岡田がどのようにして『精神診断学』を手にしたか、如何なる経緯で岡田が RIM 研究に着手することになったのかは、現在分かっていない。所属していた京都帝国大学の指導教官や教室員などの影響から RIM に取り組み始めたと想像することはできる（ただし、京大の学風から推測するに、指導教員が岡田に RIM に取り組むよう示唆したとは考えられにくい）。

岡田は、こうした経緯を何一つ活字に残してはいない。周辺の文献でも、岡田が最初に RIM に取り組んだ研究者であることは明記されはするものの（笠原，2003 など）、この点を記したものはない。後に岡田が岐阜大学医学部精神医学教室の初代教授となり、助教授として共に働いた杉本直人博士に実施したインタビューでも、岡田の RIM との出会いなどについては、判明しなかった（杉本，2014）。岡田は自らの個人的な話を周囲にほとんどしなかったという。したがってこれ以上、岡田の仕事の始まりを明らかにすることはできなかった。

3.2　内田の入手経緯

内田勇三郎は、先に引用した彼を筆頭とする論文で『精神診断学』を引用してはいない。しかし、内田も同

じく『精神診断学』原著初版を有していたことは分かっている。内田との個人的対話を残した秋山（1968）によれば、内田が原著初版を見つけたのは 1925 年、東京は神田の古書店であったという。しかしながら、内田が手にした『精神診断学』がどのような経緯で店頭に置かれていたのかは分かっていない。古書店がスイスから購入していた、あるいは、日本で最初に『精神診断学』を手にした誰かが、何らかの事情で手放したと推測することはできるが、それ以上は分からない。内田について詳しく検討している安齋（2007）の研究でも、その点は述べられていない。内田の長子・内田純平氏へのインタビューによれば、現在、内田が購入した『精神診断学』を家族は所有していないという（内田，2012）。したがって、内田の RIM 業績の始まりも、これ以上明らかにすることはできなかった[6]。

3.3　第三冊目の存在

このように、1930 年までに日本には 2 冊の『精神診断学』原著初版が存在していたことが分かる。筆者らはこうした調査を進める中で、岡田と内田とは別の経路で、しかしおそらくほぼ同時期に日本にもう 1 冊の『精神診断学』が入ってきていたことを知った。

それは、1925 年 9 月 1 日に生じた関東大震災の被害に対し、国際連盟が東京帝国大学図書館復興援助の決議から（東京大学図書館 Web サイトより）、スイスより寄贈された 1 冊である。本書は今も同図書館に所蔵されており、所蔵書の見開き部分には、上述の経緯が短く記されている。ただし、受け取り年月日などの記載はない。

3.4　当時の『精神診断学』

以上より、日本最初の RIM 論文が発刊される 1930 年以前に、少なくとも 3 冊の『精神診断学』原著初版が日本に存在していたことが判明した。精神医学史家で Rorschach 書簡集の編者でもある Rita Signer 女史によると、この時期に原著初版が 3 冊も日本に入っていたことは大変驚きであるという（Signer，2012）。当時、欧州でさえ『精神診断学』は簡単に入手できなかったためである。Exner（2003／2009，p.28）もこの点に言及しており、この時期米国では『精神診断学』が簡単に入手できなかったため、1929 年、後に現代 RIM の礎を築く S. J. Beck（当時、コロンビア大学大学院生）が米国において手にしたそれもコピーであった。

これらの事実は、日本が RIM をいち早く導入した国であることを、一層強調するものであろう。この『精神診断学』の訳書は、今日までに、東京ロールシャッハ研究会訳による 2 冊、片口安史訳による 1 冊、鈴木睦夫訳による 1 冊の計 4 冊が刊行されている。

4．黒田重英の仕事――戦前の RIM 研究

4.1　1945 年による RIM 史の区別

筆者らは、日本産インクブロット図版を検討する中で、1958 年が日本の RIM 研究の転換点であるとした（佐渡ら，2015）。しかし長坂（1958）は、第二次世界大戦の終戦を迎えた 1945 年以前の研究を「追試の域を余り出ていない」とし、1945 年までは「いわば追試期の時期であり、導入期であった」と述べている。そこで本研究では、長坂に従って、1930 年～1958 年の時期をさらに終戦前後に分けて考えることとする。1945 年以前の RIM 研究の特徴を捉えることは、日本への RIM 輸入過程を一層明らかにすると思われたからである。

1959 年までの RIM 邦文文献リスト（佐渡ら，2012）によると、1930～1945 年に我が国で報告された論文は 17 編、博士論文は 3 編、専門書籍は 0 冊であった。

論文 17 編のうち、7 編は既述した岡田と内田によるもので、4 編は橋本健一（当時、東京帝国大学医学部脳研究所）による RIM 紹介を目的とした一連の論文である（橋本，1943a，b，c＆d）。残り 6 編の中に興味深い研究はあるけれど、ここでは触れない。

博士論文の 3 編とは、先に触れた岡田強（1932 年）のもの、ロボトミー手術前後の RIM 結果を比較した城谷（1942）、そして RIM の全般的追試を行った黒田（1945）がある。

以下、黒田の博士論文を熟読し検討することで、長坂の言う「追試期」の特徴を描出したい。

4.2　黒田重英について

さまざまな文献を渉猟したが、黒田重英（生年不明、故人となったことは分かっている）についてはほとんど分からなかった。大阪大学精神医学教室 120 記念誌編集委員会（2014）による『精神医学の潮流』内での記載、および長坂（1958，1987）を拠り所に紹介する。

黒田は 1941 年に大阪帝国大学医学部精神医学教室入局。RIM 研究を始めたのはその時からである。RIM 図版は、第四代教授・堀見太郎（1900－1955）が 1937～38 年に欧米を外遊した時に 2 部購入していた。戦時中の大学附属病院の『医局日誌』（『精神医学の潮流』所収）に名前が出ることから、大学卒業後から終戦まで、大阪で医師として勤めていたと分かる。終戦後、GHQ の統治が定着する前の 1945 年 10 月 6 日、「ロールシャッハ氏テストに関する研究」により医学博士（大阪帝国大学）を授与された。1946 年には故郷の三重県亀山市へ帰り、病院医師として働いた。

4.3　黒田の博士論文

この黒田が提出した博士論文は、1941 年からデータを収集したものである。形を成したのは終戦直後で、すべて手書きであった。当時の社会情勢から致し方ないと

表１　黒田の博士論文の構成

主論文	題目	頁数
一	常人に於けるロールシャッハ検査成績に就いて	
1	其の一	31
2	其の二	4
二	病的人に於けるロールシャッハ検査成績に就いて	
1	第一編　其の一　癲癇の部	34
2	第一編　其の二　症候性癲癇患者中に於ける闘士型人の部	14
3	第二編　精神發育制止症	14
4	第三編　臓躁病	19
5	第四編　躁鬱病	14
6	第五編　精神分裂症	21
7	第六編　精神病質者	26

はいえ、この研究の成果が公に出ることはなった。論文の構成は表１の通りである[7]。

まず、主論文の２つを要約する。

主論文　一

前半（其の一）では、非臨床群の成人・学生 200 名に対して行われた RIM 反応が、主として Rorschach の原法、岡田による原法修正（既に引用した論文）、Schneider（1936）の明暗反応に依拠して整理されている。分析対象の変数は、反応数、不答数（Fail と Reject を含む）、反応時間、反応領域、決定因（運動反応、色彩反応、明暗反応）、反応内容（動物反応％や新規反応％も含む）、F+％、把握型、そして体験型である。それぞれのスコアの平均や頻度を検討しつつ、性差の比較も行っている。本研究は本邦における再標準化の作業といえる。そして、各臨床群と比較するための下地・基準を構築する作業でもあった。ここで使用した変数が、以下すべての研究で使用されている。

後半（其の二）で黒田は、RIM を多人数に実施することの困難さに触れてから、試みとして RIM の全図版の結果とⅠ～Ⅲ図版のそれとを比較し、両結果は総じて近似していることを見出している。ただし黒田は、たとえば「実施はⅠ～Ⅲ図版のみでよい」のような性急な提言を行ってはいない。

主論文　二

ここの７編はいずれも各臨床群に特徴的な RIM 反応を捉える試みである。それぞれの対象は以下の通りである。

論文１：真性てんかん患者 168 名、および症候性てんかん患者 97 名。

論文２：先の症候性てんかん患者 97 名のうち、体格的類型論（E. Kretschmer）における闘士型 35 名。

論文３：知的障害（精神発育発達症）の成人 15 名。

論文４：ヒステリー（臓躁病）患者 15 名。

論文５：躁うつ病（躁鬱病）患者 20 名。

論文６：統合失調症（精神分裂症）患者 19 名。

論文７：精神病質者 13 名（うち、不全症 9 名と懐疑症 4 名）。

これらの RIM 結果（先述した変数）を、「主論文　一」で実施された非臨床群と、そして適宜他の臨床群とで比較するのが黒田の方法論であった。

全論文において、ほぼすべての変数を臨床群と比較群との間で有意差検定にかけており、今日からすれば、統計学的な過誤の可能性に黒田は無自覚であったように見える。そして、定量的研究であるものの、論文１のてんかん患者群以外は対象者数が少なく、各臨床群の特性をどれほど抽出しえたかという疑問も生じる。方法論上の問題は幾つか認められるが、扱った変数の平均値等はことごとく記載されている。

4.4　黒田の仕事の位置づけ

Rorschach（1972［1921］／1999）は『精神診断学』の中で非臨床群の調査経験、および幾つかの臨床群の調査経験をまとめている。黒田が「主論文　二」で対象とした群はどれも、創案者 Rorschach がすでに検討した対象である。さらに、「主論文　二」の「論文 2」、体型と RIM 反応との関係は、日本で 1930 年に内田ら（1930 a＆b）が検討している（内田はてんかん患者を対象とはしていない）。したがって、黒田の博士論文全体は、日本人を対象に行った包括的追試といえる。

追試を行うこと、そして日本人のデータで改めて検討することは重要な仕事である。そうした試みの中で、黒田の先見性が特に読み取れる部分がある。第一は、実施する図版数の、つまり実施時間の削減の可能性に触れたと読める論文は、世界的に見ても先進的な発想である。米国でこの種の議論がなされ始めたのは、1950 年代だ

からである。第二は、検討した全群の統計値を漏れることなく提示し、後進に対して一定の参照枠を提示した点である。筆者らは、研究には誠実な積み重ねが重要であること、そしてこの時代に一人の研究者が数種の臨床群を量的に研究した試みは海外でも見当たらないことを鑑み、この2点を黒田の業績として明確にしたい。

黒田の仕事は、これまで日本でも顧みられることは少なかった。学術論文として公開されなかった知見であるため、大阪大学の研究者以外、存在も知らない者が多かったであろう。日本のRIM研究の最盛期である1960年代になると、黒田の研究は、存在を知る者でさえ参照しがたいものとなった。それは、黒田が使用したスコアリング法が古く、幾つかの問題を孕んでおり、新しいデータとの比較が困難なためである。

このようにして、第二次世界大戦中に日本人を対象に収集されたRIM結果は、RIM発展・変化に取り残され、注目されることはなかった。しかし、初期の研究者であった黒田がRorschachの体系的な追試を、学術研究の困難な時代に我が国で行ったということは、銘じるべき日本のRIMの史実である。世界に誇るRIMシステムである阪大法は、同門の長坂（1950）を通じ、後に辻悟が中心となって創案する。黒田の仕事はその下地になったとも解することができるのである。

5．おわりに

本稿では、我が国でRIM論文が最初に報告されるまでの歴史を描写し、1930年までの『精神診断学』原著初版の輸入に関する事実を整理した。そして、第二次世界大戦の最中にRIMの体系的追試を行った黒田重英の業績を検討した。更なる調査を要する部分はあるが、本研究において日本へのRIM輸入過程を概観することができた。

最後に、日本のRIM史の大まかな沿革を本稿末尾に図示する（図2）。

註　釈

1) 本論文の一部は、佐渡ら（2012）および佐渡（2014）の調査結果と重複する。本稿は新しい調査結果を追加し、「輸入過程」に焦点を絞って再検討し、まとめ直したものである。

2) Ellenbergerは言及していないが、Rorschachは1911年に病理学研究を共著で発表している（Brunner & Rorschach, 1911）。したがって、Rorschachは当初、生物学的精神医学にも関心を持っていたと推測される。

3) 岡田強については別稿で詳細に論じる予定である。今後の研究の資料として、本稿末尾に、筆者らが把握した岡田の全業績を掲載する。

4) 日本で制作されたオリジナル図版の歴史的検討については、佐渡ら（2015）を参照されたい。

5) 確認できた11編の学位論文は以下の通りである。これらの内、Rorschachと同じチューリヒ大学に提出されたものは7編である。その著者たちの研究環境が、岡田のそれよりも遥かに恵まれていたことは想像に難くない。

Munz, E. (1924) Die Reaktion des Pyknikers im rorschachschen psychodiagnostischen Versuch: Inaugural-Dissertation. Universität Zürich.

Pfister, O. (1925) Ergebnisse des Rorschach'schen Versuches bei Oligophrenen. Universität Zürich.

Löpfe, A. (1925) Über Rorschach'sche Formdeutversuche mit 10-13jährigen Knaben. Universität Zürich.

Pfister, O. (1925) Ergebnisse des Rorschach'schen Versuches bei Oligophrenen. Universität Zürich.

Furrer, A. (1927) Der Auffassungsvorgang beim Rorschach'schen psychodiagnostischen Versuch. Universität Zürich.

Bänziger, H. (1927) Die Frage der Schizophrenie bei einem Mitglied der Sekte Anton Unternährers. Universität Zürich.

Juarros, C. (1929) El psicodiagnóstico de Rorschach en los niños, (normales y anormales): 100 observaciones personales. Universidad de Madrid.

Bleuler, M. (1929) Der Rorschachsche Formdeuteversuch bei Geschwistern. Universität Zürich.

Fuchs, P. (1929) Experimentelle Untersuchungen zum Problem der Auffassung: Ein Beitrag zur Psychologie der Wahrnehmung, des Denkens und der Gestalt. Universität Bonn.

Furrer, A. (1930) Der Auffassungsvorgang beim Rorschach'schen psychodiagnostischen Versuch. Universität Zürich.

Struve. K. (1930) Typische Ablaufsformen des Deutens bei 14-15-jährigen Schulkindern. Universität Hamburg.

6) 内田の家族は、周囲から内田・クレペリン作業検査に関する業績はよく聞いてきたが、RIMの業績に関しては、周囲からも内田本人からも、ほとんど聞くことはなかったという（内田，2012）。

7) 黒田の博士論文には『参考論文』として以下の業績が付されている。しかし、いずれもRIM研究ではないため、本稿では取り上げない。

一：癲癇の臨牀的研究

二：卒中ノ經驗的遺傳豫後ニ就イテ

三：「メチレン青」ノ治療的應用（其3）――血尿ニ對スル0.5%「メチレン青」等張葡萄糖靜脈内注射ノ止血作用ニ就テ

四：久保教授等の提供による「エリトロメラルギー」の

「コカイン」動脈内注射療法を施行せる症例に就て
五：咽頭分泌物エキスのアンギーナに對する効果
六：縣下女子中等學校に於ける集團檢査の成績に就て（第一報）
七：健康女學生の赤血球沈降速度と血液型

付　記

本研究は平成 23-25 年度科学研究費補助金（若手研究 B: 23730653）の成果の一部である。

謝　辞

インタビューに応じてくださり、論文で引用することを許諾してくださった内田純平先生、Rita Signer 先生、杉本直人先生に感謝申し上げる。また、本稿の執筆をご指導くださった山本眞由美先生に深謝する。

岡田強の業績一覧

岡田強（1926）精神症候の見方に就て．生理学研究，3（11），707-714.
三浦百重・沼田作・岡田強（1926）道德判斷ノ臨床的査定法．社会医学雑誌，479，742-757.
岡田強（1930）常同的現象ト強迫觀念．神經學雜誌，32（5），352-361.
岡田強（1930）ロールシャッハ氏精神診斷學用「テキスト」ノ含ム形態竝ビニ意味ノ研究．神經學雜誌，31（8），652.
岡田強（1930）ロールシャッハ氏ノ所謂「神神診斷學」ノ實驗的考察（第一回報告）――ロールシャッハ氏精神診斷學用「テキスト」ニ於ケル形態竝ビニ意味ノ研究．神經學雜誌，32（5），43-55.
岡田強（1930）ロールシャッハ氏ノ所謂「神神診斷學」ノ實驗的考察（第ニ回報告）――ロールシャッハ氏「精神診斷學」ノ施行方法ニ對スル實驗的研究．神經學雜誌，32（6），41-49.
岡田強（1931）精神病者殊ニ精神分離症患者ニ於ケル供述異常ノロ氏神診斷學的分析．神經學雜誌，33（3），176-177.
岡田強（1932）ロールシャッハ氏ノ精神診斷學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析（上）．神經學雜誌，35（2），39-82.
岡田強（1932）ロールシャッハ氏ノ精神診斷學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析（中）．神經學雜誌，35（3），59-75.
岡田強（1932）ロールシャッハ氏ノ精神診斷學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析（下）．神經學雜誌，35（4），70-91.
岡田強（1932）ロールシャッハ氏「精神診斷學」ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析．京都帝国大学博士論文.
岡田強（1935）精神分離症ニ於ケル一小実験．京都帝国大学医学部精神病学教室（編）今村新吉教授還暦祝賀記念論文集．京都帝国大学医学部精神病教室，pp. 335-340.
岡田強（1936）文明と狂想．人文書院.
岡田強（1940）時間の抵抗．神経質，11（2），63-71.［『神經と生活』所収］
岡田強（1940）意気．神経質，11（3），74-82.［『神經と生活』所収］
岡田強（1940）心の觸手．神経質，11（4），126-134.［『神經と生活』所収］
岡田強（1940）磨かれる神經．神経質，11（7），215-223.［『神經と生活』所収］
岡田強（1940）神経の節約．神経質，11（12），361-370.［『神經と生活』所収］
岡田強（1942）神經と生活――神經質の病療誌より．青山出版社.
岡本重一・山本錄次・土屋榮吉・川越直次・岡田強・佐々木恒一・青木亮（1943）精神病院ニ於ケル事故ニ關スル統計的觀察．京都医学雜誌，40（6），668～701.
岡田強（1953）DILTHEY の所謂精神生活の收得関聯に就て．岐阜醫科大學紀要，1（3），195-200.
岡田強（1954）妄想の論理．岐阜醫科大學紀要，2（1），1-6.
岡田強（1954）精神分裂病性直観．岐阜醫科大學紀要，2（3），227-232.
岡田強（1955）志向性の変化に就て．精神神經學雜誌，55（1），15-21.
岡田強（1955）狂気と詩的実存．岐阜醫科大學紀要，2（3），381-388.
岡田強（1957）滅裂症に就いて．岐阜醫科大學紀要，4（6），506-520.
岡田強（1958）意識と反射．岐阜醫科大學紀要，6（2），237-242.
岡田強（1958）精神病者の絵画．岐阜醫科大學紀要，6（3），326-335.
岡田強（1959）精神病学的人間．岐阜醫科大學紀要，7（6），1518-1523.
岡田強（1961）巻頭言 発刊の辞．岐阜精神衛生，1（1），1.
岡田強（1962）F. Nietzsche 病誌論．岐阜醫科大學紀要，10（1），1-15.
岡田強（1964）L. Binswanger の精神病学．岐阜醫科大學紀要，12（4），320-324.
岡田強（1967）阪本先生．阪本健二・阪本正男・阪本良男（編）阪本三郎――寄稿文集．阪本病院，pp. 43-44.

文　献

120 記念誌編集委員会編『精神医学の潮流――阪大学精神医学教室 120 年の歩み』新興医学出版社．2014 年
秋山誠一郎「内田勇三郎博士とロールシャッハ法」『ロー

ルシャッハ研究』IX-X 合併号、241-244 頁、1968 年
安齋順子「ロールシャッハ・テストと内田勇三郎（日本心理学会第 70 回大会ワークショップ報告 日本における臨床心理学の導入と受容過程 3）『心理学史・心理学論』第 9 号、55-58 頁、2007 年
Brunner, C. & Rorschach H., Über einen Fall von Tumor der Glandula pinealis cerebri. *Correspondez-Blatt für Schweizer Ärzte*, 18, 1-4, 1911.
Ellenberger, H.F. The life and work of Hermann Rorschach (1884-1922). *Bulletin of the Menninger Clinic*, 18(5), 173-219, 1954. 中井久夫訳「ヘルマン・ロールシャッハの生涯と仕事」『エランベルジェ著作集 1――無意識のパイオニアと患者たち』みすず書房、3-82 頁、1999 年
Exner, J. E. Jr. *The Rorschach: A Comprehensive System Volume 1: Basic Foundations and Principles of Interpretation,* 4th edition. Hobokne: John Wiley & Sons. 2003. 中村紀子・野田昌道監訳『ロールシャッハ・テスト――包括システムの基礎と解釈の原理』金剛出版、2009 年
橋本鍵一「ロールシヤツハの精神診斷學に就て」『精神と科学』第 17 巻 7 号、1-24 頁、1943a 年
橋本鍵一「ロールシヤツハの精神診斷學に就て（二）」『精神と科学』第 17 巻 8 号、1-19 頁、1943b 年
橋本鍵一「ロールシヤツハの精神診斷學に就て（三）」『精神と科学』第 17 巻 10 号、1-19 頁、1943c 年
橋本鍵一「ロールシヤツハの精神診斷學に就て（四）」『精神と科学』第 17 巻 11 号、32-35 頁、1943d 年
堀見太郎・杉原方・長坂五朗「歴史的発展と意義」戸川行男・松村常雄・児玉省・懸田克躬・小保内虎夫監修，本明寛・外林大作編『ロールシャッハ・テスト 1（心理診断法双書，第 1 巻）』中山書店、1-39 頁、1958 年
笠原嘉「精神病理学」京都大学医学部精神医学教室編『精神医学京都学派の 100 年』ナカニシヤ出版、10-15 頁、2003 年
Kataguchi, Y., The development of the Rorschach test in Japan. *Journal of Projective Technique,* 21(3), 258-260. 1957.
片口安史『心理診断法――ロールシャッハ・テスト』牧書店、1956 年
片口安史『改訂 新・心理診断法』金子書房、1987 年
クレム，O.「ライプチッヒに於ける第八回心理學大會（一九二三年四月十七日～廿日）『日本心理學雑誌』第 1 巻 4 号、539-553 頁、1923 年
黒田重英「ロールシャッハ氏テストに関する研究」大阪帝国大学博士論文、1945 年
Lang, A. (Hrsg.) *Rorschach-Bibliograpgie*. Bern und Stuttgart: Hans Huber. 1966.
本明寛「ロールシャッハ検査に於ける良形態反應の研究」『心理学研究』第 17 巻 2 号、271-281 頁、1942 年
本明寛『臨床的精神診斷法解説――早稲田大學心理學教室改訂 ロールシャッハ検査』金子書房、1952 年
本明寛『改訂増補 臨床的人格診断検査解説――臨床心理学研究会改訂 ロールシャッハ検査』金子書房、1955a 年
本明寛『集団用人格診断検査の手引』金子書房、1955b 年
長坂五朗「ロールシャツハテストに関する研究（その一）」『精神神経学雑誌』第 54 巻 4 号、219-253 頁、1950 年
長坂五朗「ロールシャッハ十余年」『ロールシャッハ研究』Ⅰ号、149-157 頁、1958 年
長坂五朗「ロールシャッハ戦後事始め」辻悟・河合隼雄・藤岡喜哀・氏家寛編著『これからのロールシャッハ――臨床実践の歴史と展望』創元社、3-13 頁、1987 年
Ogawa, T., The development of the Rorschach in Japan: A brief introduction. *South African Rorschach Journal*, 1(2), 40-45. 2004.
小川俊樹「日本のロールシャッハ法」『ロールシャッハ法研究』第 15 巻、10-19 頁、2011 年
岡田強「ロールシヤッハ氏精神診斷學用「テキスト」ノ含ム形態竝ビニ意味ノ研究」『神経学雑誌』第 31 巻 8 号、652 頁、1930a 年
岡田強「ロールシャッハ氏ノ所謂「精神診斷學」ノ實驗的考察（第一回報告）――ロールシャッハ氏精神診斷學用「テキスト」ニ於ケル形態竝ニ意味ノ研究」『神經學雑誌』第 32 巻 5 号、361-373 頁、1930b 年
岡田強「ロールシャッハ氏ノ所謂「精神診斷學」ノ實驗的考察（第ニ回報告）――ロールシャッハ氏「精神診斷學」ノ施行方法ニ對スル實驗的研究」『神經學雑誌』第 32 巻 6 号、41-46 頁、1930c 年
岡田強「ロールシャッハ氏ノ精神診斷學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析（上）」『神經學雑誌』第 35 巻 2 号、39-82 頁、1932a 年
岡田強「ロールシャッハ氏ノ精神診斷學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析（中）」『神經學雑誌』第 35 巻 3 号、59-75 頁、1932b 年
岡田強「ロールシャッハ氏ノ精神診斷學ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析（下）」『神經學雑誌』35 巻 4 号、70-91 頁、1932c 年
岡田強「ロールシャッハ氏「精神診斷學」ニ於ケル反應ノ質的分類竝ニ本法ニヨル供述異常ノ分析」京都帝国大学博士論文、1932d 年
Rorschach, H., Pferdediebstahl im Dämmerzustand. *Archiv für Kriminalanthoropologie und Kriminalistik*, 49, 175-180, 1912. Nachgedruckt in K. W. Bash (Hras.) Hermann Rorschach: Ausgewählte Aufsätaze. Bern: Hans Huber, SS. 64-68. 1965. 空井健三・鈴木睦夫訳「もうろう状態での馬泥棒」『ロールシャッハ 精神医学研究』みすず書房、75-81

頁、1986 年
Rorschach, H., Zur Pathologie und Operabilität der Tumoren der Zirbeldrüse. *Beitrag zur klinischen Chirurgie*, 83, 451-474, 1913.
Rorschach, H., *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments [Deutenlassen von Zufallsformen]*. Bern: Hans Huber. 1921. 東京ロールシャッハ研究会訳『精神診断学――知覚診断的実験の方法と結果（偶然図形の判断）』牧書店、1958 年
Rorschach, H., *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments [Deutenlassen von Zufallsformen]*. Bern: Hans Huber. 1921. 東京ロールシャッハ研究会訳『精神診断学――知覚診断的実験の方法と結果（偶然図形の判断）：付・ロールシャッハ伝』牧書店、1969 年.
Rorschach, H., *Psychodiagnostik Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments [Deutenlassen von Zufallsformen]*. Bern: Hans Huber. 1921. 片口安史訳『改訳版 精神診断学――知覚診断的実験の方法と結果（偶然図形の判断）』牧書店、1976 年
Rorschach, H., *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments [Deutenlassen von Zufallsformen]*, 9.Auflage. Bern: Hans Huber. 1972[1921]. 鈴木睦夫訳『新・完訳 精神診断学――付 形態解釈実験の活用』金子書房、1999 年
佐渡忠洋「日本におけるロールシャッハ法の輸入過程と発展過程の検討 2011～2013 年度科学研究費助成事業研究成果報告書（若手研究（B）：23730653）」2014 年
佐渡忠洋・伊藤宗親・田中生雅・山本眞由美「日本のロールシャッハ法黎明期の研究特徴」『岐阜大学カリキュラム開発研究』第 29 巻 1 号、39-45 頁、2012 年
佐渡忠洋・西尾彰泰・伊藤宗親・山本眞由美「日本で制作されたインクブロット図版の歴史的検討」『ロールシャッハ法研究』第 19 巻、37-47 頁、2015 年
Schnerider, R., *Psychodiagnostisches Praktikum fur Psychologen und Padagogen. Eine Einfuhrung in Hermann Rorschachs Formdeutversuch*. Leipzig: Barth. 1936
城谷敏男「前頭脳切除患者（癲癇）に施行せるロールシャッハ精神診断法に就て」新潟医科大学、1942 年
Signer, R.,「個人インタビュー」Im Zentrum Paul Klee, Zürich, Schweiz. Jul. 18, 2012.
Sorai, K. & Ohnuki, K., The development of the Rorschach in Japan. *Rorschachiana*, 29(1), 38-63. 2008.
杉本直人「個人インタビュー」於 医療法人杏野会各務原病院，岐阜．2014 年 2 月 14 日
田村於兎「松果腺腫瘍ノ一例」『岡山醫學會雑誌』第 31 巻（通号 352）、385-392 頁、1919 年
戸川行男・本明寛『臨床的性診斷法手引――早稲田大學改訂 ロールシャッハ檢査』金子書房、1950 年
戸川行男・松村常雄・児玉省・懸田克躬・小保内虎夫監修，本明寛・外林大作編『ロールシャッハ・テスト 1（心理診断法双書，第 1 巻）』中山書店、1-39 頁、1958 年
戸川行男・松村常雄・児玉省・懸田克躬・小保内虎夫監修，本明寛・外林大作編『ロールシャッハ・テスト 1（心理診断法双書，第 2 巻）』中山書店、1-39 頁、1958 年
東京大学図書館 Web サイト「東京大学図書館の略史（関東大震災後）【2018 年 8 月 20 日閲覧】
http://www-old.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai95/history-b.html
東京ロールシャッハ研究会監修『標準ロールシャッハ図版』牧書店、1958a 年
東京ロールシャッハ研究会編『ロールシャッハ研究 I』牧書店、1958b 年
内田純平「個人インタビュー」於 日本精神技術研究所，東京．2012 年 11 月 11 日
内田勇三郎『素質型と其の心理學的診斷（クロモ シリーズ）』三省堂、1930 年
内田勇三郎・松井三雄・本田實昌・谷本揆一・山根薫「素質の實驗類型心理學的研究（一）」『教育心理研究』第 5 巻、323-345 頁、1930a 年
内田勇三郎・松井三雄・本田實昌・谷本揆一・山根薫「素質の實驗類型心理學的研究（二）」『教育心理研究』第 5 巻、385-417 頁、1930b 年
氏家信「ロールシャッハ。「朦朧状態中に行へる馬盗み」」『神經學雑誌』第 12 巻 4 号、197 頁、1913 年

ドイツ語原著『精神診断学』出版	諸外国における『精神診断学』と動向	年	日本における動向		
第1版.		1921		空白期	
		1923	『日本心理學雑誌』での言及（O. クレム）		
		1925	内田勇三郎『精神診断学』原著初版を入手		
			『精神診断学』原著初版が東大図書館へ寄贈		
		1930	最初の RIM 論文発表（岡田強、内田勇三郎ら）	輸入期 or 追試期 1945年まで	↑ 日本におけるロールシャッハ法の黎明期（1930～1958年）
第2版		1932	RIM 博士論文第1号（岡田強）		
第3版		1937			
第4版		1941			
	英語訳	1942	RIM 博士論文第2号（城谷敏男）		
		1943	雑誌に『精神診断学』の解説（橋本健一）		
		1945	RIM 博士論文第3号（黒田重英）		
第5版		1946		準備期 1946年～1957年	
	フランス語訳	1947			
第6版	スペイン語訳	1948			
		1950	戸川行男・本明寛著『臨床的精神診断法手引』		
	ISR 設立	1952	本明寛著『臨床的精神診断法解説』		
第7版		1954			
		1955	本明寛著『集団用人格診断検査の手引』		
		1956	片口安史著『心理診断法』		
		1958	訳書『精神診断学』（東京ロールシャッハ研究会訳）	転換点としての1958年	
		〃	戸川行男ほか監修『心理診断法双書』（2冊）		
		〃	研究雑誌『ロールシャッハ研究』刊行開始		
		〃	『標準ロールシャッハ図版』販売開始		↓
第8版		1962			
	ポルトガル語訳	1967			
		1969	訳書『精神診断学』（東京ロールシャッハ研究会訳）		
第9版		1972			
		1976	訳書『精神診断学』（片口安史訳）		
	イタリア語訳	1981			
第10版		1983			
第11版		1992			
		1994	包括システムによる日本ロールシャッハ学会設立		
	中国語訳	1997	日本ロールシャッハ学会設立		
第12版		1999	訳書『精神診断学』（鈴木睦夫訳）		
	ルーマニア語訳	2000			
	ハンガリー語訳	2002			
	ロシア語訳	2003			

図2　日本における RIM 史 ―― 輸入過程を中心に